

様々な自然災害を体験すると、「地球は生きているなあ！」と実感するこのごろ。その地球で生かされている私達人間も『地球の構成要素の「ひとつ』』という考え方を持つと色々なものが見えてきます。

私は神戸の地震を通じ、人の心の真の姿に触れ合うことができました。

私は地震の翌日の18日に3件の友人宅に「水」を届けるために舞鶴を出発した。約9時間をかけてやっと芦屋の友人宅に着くことができた。常なら2時間足らずで行くことができるのだが、それも裏道を駆け抜けての9時間であった。

次は神戸の友人M氏に水を届ける為に目印になりやすい場所ということでJRの本山駅で会うことを決め芦屋を出発した。

山手から下に進むにつれて信じ難い光景が目に入ってくる。

芦屋駅の東側あたりは2階建ての商店街が軒並み1階建てに変わっていた。

国道2号線を進むと道の両サイドはほとんどの電柱が傾き、木造の家の多くは形が無い状態である。

これらの家の下には多くの方々が生き埋めの状態にあるのかと思うと、手を合わせずにはおれなかった。

いたるところの電線が垂れ下がり、信号機も宙づりの状態である。

今にも倒れそうな家や電柱を縫うようにして進んだ。

道路はひび割れと、隆起、陥没を繰り返しており、車の底をすりながらゆっくりとしか動けない。

道の両サイドには夜中というのに多くの人々が知人を探して、又、水を求めて着のみ着のままの状態で歩いている。

広島に原爆が落とされ、被爆した人々が水を求めて放心状態であるという写真を見ることがあるが、

その写真がそのまま私の目の前で現実として起こっている。

本当に信じられないというより信じたくないといったのが素直な気持ちであった。

そのうち少しずつの進み方ではあったが目印となるJR本山駅近くにやって来た。

しかし私の知っている本山駅周辺の景色はそこにはなかった。

仕方なく、道の中央分離帯部分にテントを張っていた人に道を尋ねることにした。

声を掛けると金色の髪をしたヤンキーっぽい若者である。

普通ならつっぱった返事が返ってくるころだろうけど、この時は違っていた。

とても親切に、そしてやさしく教えてくれたのである。

そして「気をつけて行ってくださいよ。」とまで付け加えてくれたのであった。

こんな大変な時につっぱりは何の役にも立たない。

一人で生きていたと思っていたであろう彼らも、今は人々と力を合わせなければ生き抜くことができないことを悟っているかのようであった。

そして生き残っていることへの感謝の気持ちさえもひしひしと伝わってくる。

他人を思いやる心も伝わってくる。

道中、何度か私は車線変更をする為、少し無理かなと思いつつもウィンカーを出すと、すぐ横の車が親切に道を譲ってくれるのである。

運転マナーの悪さで有名な関西のドライバーはそこには存在していなかった。

生き残っている皆がそれぞれに本来の人間らしさに気付いた行動を無意識のうちにしているのである。

生き残っている人々、皆の心が同じ視野、同じ価値観を持っているのを感じる。

精神と肉体がひとつになって動いている。

これは当たり前のことのようだけれど、とても難しいことである。

肉体を持った我々が無の境地を味わうことが困難であるように、心と体がひとつになった行動とは本当に難しい。

しかしこの周りの人々は無意識のうちにそんな行動ができています。

一人一人が穏やかではあるが光り輝いているように私は感じた。

私自身の心と体が洗い清められる思いであった。

その姿は皆、言葉に表現し得ない行動を周りに伝え、与えてゆく。

廃墟と化した街のいたるところでその光景が見える。

人間の行動を分析し、科学された行動心理学のデータの中には存在しないような尊い行動である。

金銭的な価値観を基本とした尺度はまったく意味をなさない状態の中で、ただ存在するのは本来の人間（生命体）としての

「心のあたたかさの満足」を基本尺度とし、「LOVE」をエネルギーとした人々のみが存在する。

尊い多くの命を犠牲にはしたけれども、この有様をテレビで見ている人々にも、

本来の人間（生命体）として忘れていたものを目覚めさせて頂けるのではないだろうか、と考えていた。

その時、携帯電話のベルが鳴った。

M氏である。

互いに現在の位置を確認し合った。

私は間もなく JR 本山駅に到着するところにいた。

駅のすぐ手前で火災が発生した。

私はそのすぐ近くを進みながら、先ほどの若者が教えてくれた駅への交差点をさがした。

「あった！」本山駅への案内板が地震に負けずに立っていた。

すぐにウィンカーを出し曲がろうとした。

しかし目の前の駅に通じる道の入り口には電信柱が横倒しになり、その先の家の 2 階部分が道へ倒れ通ることができない。

仕方なく、迂回をして M 氏へ電話を掛けた。

そして再度新たな目印を決めそこで会うことができた。

「元気で良かった！」と声を掛けるのもそこそこに「この周りは危険だから家までいこう」ということで、

M 氏のあとを追って自宅へと向かった。

M 邸へついたのは午前 1 時近くだったと思う。

玄関には倒れて壊れたキャビネットがあったが、私は驚きもせずこれも当たり前だと思った。

この状態に少しずつ慣れてしまった自分自身に気付いた私は、M 氏を含め被災者の方々と同じ立場でがんばらなければと思ったのである。

持参した水と少しであるが食糧を部屋まで運び地震の状況について伺った。

ご家族は無事であったが、ご親戚の方が家の下敷きになっていたのを助けられたとのお話をうかがった。

話をしている時にも余震が襲ってくる。

その度に緊張が体を走るのがわかる。

少しでも早く戻らなければと思い、M 氏から 43 号線までの道順を教えて頂き出発した。

2 ヶ所くらいこわれた家や壁が道路をふさいでいた為バックして進んだ。

43 号線に近づくとつれ被害は大きくほとんど暗闇の状態であった。

「万一」というより「十一」の確立で大きな余震が来たらと思うと、ヒヤヒヤしながら 43 号線を走り、戻ったのである。

我々人間は自然の力に抵抗することのできない存在であることを認識しながら、さらに「地球の構成要素のひとつ」にすぎない自分自身の存在を謙虚に受け止め、自然と共に生きてゆく努力を忘れてはならないと思うのである。

合掌